フランス語における文体的倒置構文の分布上の制限について

藤田　健

はじめに

フランス語には主語と動詞句が倒置している構文が存在する。この構文は従来、文体的倒置構文(stylistic inversion, 以下SI構文)と呼ばれている。このSI構文は、直接目的語が生起する場合、その位置によって可能かどうかが制限されるという点で特徴的である。SI構文については、生成文法の枠組みで構造に関する研究が従来多くなされているが、一致した解決案は見出されていない。分布上の制限に関しては、ほとんど研究がなされておらず、あるにしても不十分なものである。本稿の目的は、まずSI構文の構造について考察し、その構造をもとにＧＢ理論の下位理論である格理論の観点からその制限を説明することにある。

以下では、次の順序で議論を進めていく。１章では、本稿で扱うSI構文の分布上の制限を記述する。２章では、SI構文に関する先行研究を、構造に関するものと分布上の制限に関するものとに分け、それぞれの分析の概観と問題点の指摘を行う。３章では、これら先行研究にかわる本稿での分析案を提示する。４章では、３章での分析を支持する現象を提示する。最後に５章で、本稿のまとめと今後の展望について述べる。

１．SI構文に見られる分布上の制限

本章では、本稿で扱う現象を見ていく。本稿で扱うSI構文とは、主語名詞句と動詞句が倒置している構文である。この構文には、動詞の種類等に関して、以下のように分布に制限がある。非能格(unergative)動詞、非対格(unaccusative)動詞、受動文、代名動詞の場合には許されるのに対し、直接目的語を含む動詞句では容認不可能である[1]。以下では、aが接続法の動詞が倒置している例、bがwh句を含む補文において倒置が起きている例である。

(1)非能格動詞

a. Je ne crois pas [qu'ait crié [Pierre]].
　I believe not that have cried
　”ピエールが叫んだとは思わない。”

b. Je me demande bien [quand a crié [Pierre]].
　I wonder well when has cried
　”ピエールはいつ叫んだのだろう。”

(2)非対格動詞

a. Je ne crois pas [que soient arrivés [les hommes]].
be arrived the men
”その人たちが到着したとは思わない。”

b. Je me demande bien [quand sont arrives [les hommes]].
”その人たちはいつ到着したのだろう。”

(3)受動文

a. Je ne crois pas [qu'aient été construits [les immeubles]].
have been constructed the buildings
”それらの建物が建てられたとは思わない。”

b. Je me demande bien [quand ont été construits [les immeubles]].
”それらの建物はいつ建てられたのだろう。”

(4)代名動詞

a. Je ne crois pas [que se soient vendus [ces livres]].
self be sold these books
”これらの本が売れたとは思わない。”

b. Je me demande bien [quand se sont vendus [ces livres]]
”これらの本はいつ売れたのだろう。”

(5)直接目的語を含む動詞句

a.*Je ne crois pas [qu'ait invité ces hommes [Paul]].
that have invited these men
”ポールがこれらの人を招待したとは思わない。”

b.*Je me demande bien [quand a invité ces hommes [Paul]].
”ポールはいつこれらの人を招待したのだろう。”

この制限は、単に動詞句に動詞以外の要素が含まれていることが原因なのではない。目的語名詞句でなく、前置詞句が含まれる場合には、次のように容認可能であるからである。

(6)前置詞句を含む動詞句

a.?Je ne crois pas [qu'aient mangé dans ce restaurant
have eaten in this restaurant
[ces linguistes]].
these linguists
”これらの言語学者がこのレストランで食事したとは思わない。”

b.?Je me demande bien [quand ont mangé dans ce restaurant

[ces linguistes]].

”これらの言語学者はこのレストランでいつ食事したのだろう。”

また、直接目的語を含む動詞句でも直接目的語が動詞に後続しない場合には可能である。直接目的語をclitic化した例が(7)、関係節で直接目的語を抜きだした例が(8)であり、いずれも容認可能である。

(7)le mendiant [à qui les a données [Marie]]
the begger to whom them has given
”マリーがそれらをあげた乞食”

(8)?les fleurs [qu'a données au mendiant [Marie]]
the flowers that has given to-the begger
”マリーが乞食にあげた花”

ここで文法性の要因となっているのが、動詞に直接目的語が後続するか否かであるということは次の例からも示唆される。

(9)*le mendiant [à qui a donné des fleurs [Marie]]
the begger to whom has given some flowers
”マリーが花をあげた乞食”

同じ動詞でも、(8)のように直接目的語が動詞に後続しない関係節の場合には容認可能であるのに対し、(9)のように直接目的語が後続する関係節の場合には容認不可能である。

このSI構文の分布に関する制限に関しては、生成文法の分野においてあまり扱われておらず、構造に関する議論が主になされてきた。上で見たように、この制限を説明するためには、直接目的語のしめる位置を考慮に入れる必要がある。以下で、SI構文の構造に関する従来の先行研究及び分布に関する制限に対する先行研究を概観し、その問題点を指摘した上で、分析をすすめていく。

2．先行研究

本章では、SI構文に関する先行研究を簡単に紹介し、その問題点を指摘していく。まず2.1でSI構文の構造一般に関する研究を見ていき、次に分布上の制限に触れた研究を見ていく。

2.1.構造に関する研究

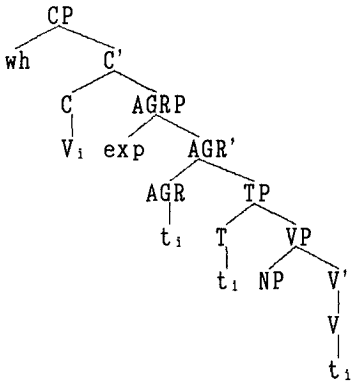
SI構文の構造に対する従来の研究は、主に二つに分けられる。一つはVがCまで主

要部移動するとするもので、もう一つは主語NPがVPの付加位置に移動あるいは基底生成されるというものである。以下でこの二つの案を検討していく。

2.1.1.Vの移動

Deprez(1990)は、SI構文はVがT,AGR[2]を経由しC主要部へ移動することによって派生されると分析している。更に、VP内主語仮説をとり、SI構文において主語NPはVP内にとどまっているとし、通常の主語の位置は虚辞の空範疇がしめるとしている。この構造は(10)のように示される。

(10)



Deprezはこの構造を仮定することによって次の現象を説明することができると主張している。

(i)いわゆるindividual level predicateの場合、SI構文が不可能である。

(11)a.individual level predicate

??Que comprennent les gens?

what understand the people

”人々は何をわかっているか。”

??Qu'apprécient les observateur?

what appreciate the observers

”傍観者は何を評価しているのか。”

b.stage level predicate

Qu'achètent les consommateurs?

what buy the consummers

”消費者は何を買うのか。”

Que disent les commentateurs?

what say the commentators

”解説者は何と言っているのか。”

Diesing(1992),Kratzer(1989)は、individual level predicateとstage level predicateという意味的な区別が、統語的な制約として反映されると主張している[3]。彼らの主張によると、stage level predicateの場合主語がVP内に生成できるのに対し、individual level predicateの場合、主語はVP内に生起することができず、VPの外に生起しなければならない。従って、individual level predicateを含むSI構文が不可能であるのは、VP内に主語が生起できないために、主語がVP内の位置にとどまっているSI構文の構造が許されないためであると説明できる。

(ii)SI構文の場合、主語内の要素の抜き出しが可能である。

(12)a.Combien$_i$ veut-il que soit dépensé [t$_i$ d'argent]?
how-much wants he that be spent of money
"彼はどれくらいのお金が消費されることを望んでいるのか。"
b.*Combien$_i$ veut-il que [t$_i$ d'argent] soit dépensé?

量化詞combienを主語NPから抜きだした場合、通常の語順の場合には容認不可能であるのに対し、SI構文の場合には容認可能である。Deprezは、SI構文の場合主語がVP内にありVによって適正統率されているのに対し、通常の語順では主語がVPの外にあり適正統率されないためにこの対立が生じると主張している。

(iii)SI構文が、補文標識siと共起できない。

(13)*Je me demande si viendra Marie.
I wonder if will-come
"マリーは来るのだろうか。"

Deprezは、siがC主要部の位置をしめるので、VがCへ移動できないためSI構文が不可能となると主張している。

以上の三点が(10)の構造に対する主要な根拠である。第一点と第二点については賛同できるが、第三点に対しては明らかな反例が存在する。(14),(15)に示すように、補文標識"que"とSI構文は共起可能である。

(14)Où crois-tu qu'est allé Jean?
where believe-you that has gone
"あなたはジャンがどこへ行ったと思いますか。"

(15)Je ne veux pas que soit invité cet homme.
I want not that be invited this man
"私はこの人が招待されることを望まない。"

もしSI構文がVのCへの主要部移動であるならば、siと同じくC主要部の位置をしめる"

que"とも共起不可能であるはずである。Deprezはこの例を説明するために、フランス語においては"que"が補文標識と疑問詞の両方に用いられることから、CP指定部とC主要部のいずれにも生起可能であるとしている。しかし、SI構文において"que"がCP指定部にあるのなら、(14)はwh-islandの構造となる。すると、"où"が抜き出されることができず、非文となると誤った予想をしてしまう。

またVP内の要素が主語に先行するという事実も説明できない。(16)のように、動詞句に前置詞句が含まれている場合、この要素は動詞に先行することができる。また、(17)のように動詞がsmall clauseを含む場合、small clause内のpredicateは主語に先行しなければならない。

(16)?Je ne crois pas qu'aient mangé dans ce restaurant
have eaten in this restaurant
ces linguistes.
these linguists
"これらの言語学者がこのレストランで食事したとは思わない。"

(17)a.Que croit beau cette fille?
what believes beautiful this girl
"この少女は何を美しいと思いますか。"
b.*Que croit cette fille beau?

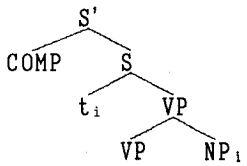
VがCへ移動し主語がVP内にとどまるならば、VP内の他の要素は主語に後続するはずであり、ここでも誤った予想をしてしまうことになる。

このようにVがC主要部に移動しているとする分析は、経験的な観点から妥当ではない。

2.1.2.主語NPのVP付加

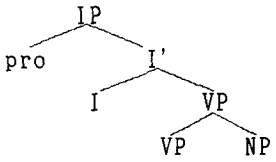
Kayne and Pollock(1978)は、主語NPがVPに付加移動すると分析している。

(18)



Noonan(1989),小川(1992)は、IP指定部にproが生成し、proと同一指標をもつNPがVP内の付加位置に基底生成されるという分析を提示している。

(19)



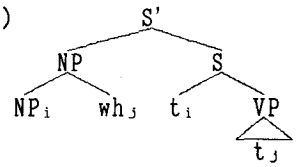
どちらもNPがIPではなくVPに付加しているとしている。これを支持する現象として、間接的ではあるが、Kayne(1986)が空の代名詞の例を挙げている。Kayneは、量化詞が名詞句を伴わずに現れる場合、[Q [e]$_{pronominal}$]のような構造をもつとし、この主要部である空の代名詞は統率されない位置においてのみ認可されると仮定している。VP内の位置が統率されるとすると、名詞句を伴わない量化詞がVP内では生起不可能であることが予想される。SI構文における主語NPがVP付加であるかIP付加であるかは、この要素が生起可能であるかどうかによってわかる。可能であれば統率されないIP付加の位置、不可能であれば統率されるVP付加の位置である。実際には、次に示されるように不可能である。

(20)a.le jour où trois sont arrivés
the day when three have arrived ”三人が到着した日”
b.*le jour où sont arrivés trois

この事実は、SI構文において主語NPがVP付加の位置にあることを示している。

しかし、(18)の構造のままでは主語NPの痕跡が先行詞である移動先の主語NPにC統御されておらず、適正束縛条件の違反となってしまう。Kayne(1980)は、これを避けるために、主語NPがLFでCOMPに移動し、wh句と主語NPがabsorption[4]を引き起こすと仮定している。

(21)



しかし、先に見たように、SI構文は主語が固有名詞である場合も可能である。

(1)a. Je ne crois pas [qu'ait crié [Pierre]].
I not believe that have cried

この場合に、operatorとは考えにくい固有名詞がwh句とabsorptionを引き起こすという考えには難がある。

(19)のようにproを仮定する構造では、痕跡が存在しないので適正束縛の問題は生

じない。しかし、IP指定部の位置にproを仮定している点に問題がある。一般にproはイタリア語等のように一致が豊富な言語においてのみ生起可能であると主張されている。

(22)pro parla inglese.
speaks English ”（彼は）英語を話す。”

実際、Rizzi(1992)は、イタリア語の自由倒置構文において(23)のようにproを仮定している。

(23)pro ha telefonato Gianni.
has telephoned ”ジャンニは電話をした。”

これに対し、フランス語では通常の語順の場合、proの生起が許されない。

(24)*pro parle anglais.
speaks English

小川(1992)は、この点に関して次のように主張している。SI構文においてのみproの生起が許されるのは、LFにおいてwh句によって引き起こされるV-IのCへの移動により、proがV-Iによって右方向に統率されるためである。しかし、この分析では、wh句が現れない接続法を含む文でもSI構文が見られるという事実を扱うことができない。

また、proが許される言語では、いわゆるthat-t効果が見られないことが知られている。

(25)Chi credi che e telefonerà?
who you-believe that will-telephone
”君は誰が電話をすると思うか。”

Rizzi(1992)は、(25)は実際には自由倒置構文で、wh句は次のようにVP内の位置から移動しているためVによって適正統率され、ECP違反を引き起こさないため文法的であると説明している。

(26)Chi$_i$ credi che pro [$_{VP}$ telefonerà t$_i$]?

もしフランス語のSI構文においてproが生起するのであれば、that-t効果が見られないことが予想される。しかし実際にはフランス語では、that-t効果が見られる。

(27)*Qui crois-tu que e téléphonera?

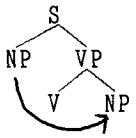
このように、通常の語順の文においてproが生起できないことや、that-t効果が見られることから、proをSI構文に設定する分析にも難がある。

以上のように、主語NPをVPに付加移動させる分析やproを仮定する分析には理論的に難点がある。

2.2.分布の制限に対する研究

生成文法の枠組みでSI構文の分布に関する制限に対して説明を与えている研究として、Emonds(1976),Dubisson(1979)がある。彼らはKayne and Pollock(1978)と同様、主語NPを移動させる分析をとっている。しかし、移動先に関しては、直接目的語の位置であると主張している。この分析では、直接目的語が動詞の後ろに現れる場合にSI構文が不可能なのは、主語NPの移動先が直接目的語によってしめられており、移動できないという理由による。

(28) *



移動不可

しかし、この分析は、自動詞の場合も直接目的語の位置が生成されることを仮定しなければ成り立たないものである。主語位置とは異なり、目的語の位置は目的語に対してθ役割を付与する動詞の場合にのみ生成されるはずである。従って、目的語にθ役割を付与しない自動詞の場合に目的語の位置が生成されることは有り得ない。

また、目的語の位置をしめる要素であれば、LFにおいてAGROP指定部に移動するため、目的語のふるまいを示すはずである。しかし、実際は、SI構文における主語NPは、定動詞との一致等、主語のふるまいを示す。

このように、この分析は理論的にも経験的にも妥当なものではない。

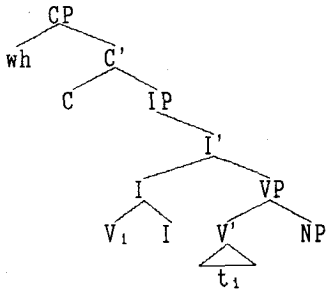
3．提案

本章では、SI構文における分布上の制限に対する分析を提案する。まず、本稿で提案する仮定を示した後で、具体的な現象についての説明を進めていきたい。

3.1.提案する仮定

本稿では、SI構文における分布上の制限は、格理論の観点から説明が可能であると主張する。SI構文の構造は、VP内主語仮説(cf.Fukui(1986),Kuroda(1988),Sportiche(1988))を採用し、以下のように仮定する。

(29)



この構造では、主語NPは、移動しているのではなく、VP内のV'の右側に基底生成されている[5,6]。主語NPの基底生成の位置については次のようなパラメーターを設定する。

(30)フランス語のVPにおいて主語NPはV'の左右いずれの位置においても基底生成が可能である。

フランス語の場合、一般に主語NPは左側に生成されると考えられているが、Giorgi and Longobardi(1991)のように右側に生成されるという分析もある。

また、(29)の構造では、VがIに主要部移動している。これは、IとVの融合に関して、Pollock(1989)が提案する次の仮定に従っている。

(31)フランス語では、S構造でVがIに繰上がっている[7]。

この主要部移動は、Deprez(1990)が主張するVのCへの移動と異なり、SI構文以外の場合も義務的に起こる移動である。

(30),(31)に基づいて(29)のような構造を仮定すれば、先行研究で指摘した問題点は解決される。VはCへは主要部移動しないので、C主要部を補文標識がしめることができ、"que"とSI構文が共起可能であることが説明できる。また、IP指定部からの主語の移動による痕跡が存在しないので、適正束縛条件も関与しないし、proの設定を仮定する必要性もないのである。

この構造を基に、SI構文の分布上の制限を説明する上で、格に関して次のような仮定をする。

(32)一つのitemは二つのNPを同じ方法でCase-indexすることができない[8]。

(33)統率による格付与は、おのおのの投射において主要部に対してcanonicalな位置にある要素に対してのみ可能である[9]。

(34)格フィルターの要請による移動の連鎖は局所的でなければならない[10]。

(35)LFにおいて主語NPはIP指定部においてφ-feature[11]のcheckingを受ける。

(32)はBaker(1988)が提案しているものである。本稿では、格付与の方法には、統率、一致及び主要部の編入(incorporation)の３種類があり、音形をもつNPはこのいずれかの方法によってＳ構造において格付与されていなければならない（格フィルター）と考える。統率、一致の区別については、Koopman and Sportiche(1991)が主張しており、主要部の編入については、Baker(1988)が主張している。また、(35)はChomsky(1991)が示唆しているものである。(33),(34)は本稿独自の仮定であるが、格理論における方向性や連鎖における局所性の重要性はしばしば議論される所であり、不自然なものではない。以下で、これらの仮定によって、SI構文と通常の語順の文との間の相違が説明できることを示していく。

3.2.SI構文におけるNPに対する格付与

１章で述べたように、後続する直接目的語を伴う動詞の場合SI構文は容認不可能である。本節では、3.1で示した仮定に基づき、まず主語NPに対する格付与の方法を考察した上で、分布上の制限が格理論によって説明できることを示していく。

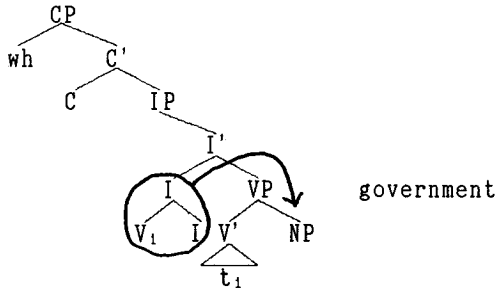
3.2.1.SI構文における主語NPへの格付与

SI構文において、主語NPに対して格がどのようにして付与されるかについて、明示的に示している先行研究はない。本稿では、SI構文の主語NPはＳ構造でV-Iによる統率により構造格を付与されると考えたい。

(29)の構造では、主語NPはIPの指定部をしめていない。構造格の付与はＳ構造において行われるので、通常の語順のようにIとの一致によって主語NPが格を受けることはできない。ではどのようにして格が付与されるのであろうか。3.1で述べたように、格付与には３種類の方法がある。(29)では主語NPの主要部であるNが編入していないので、一致以外で可能な方法は統率による格付与だけである。従って、統率によって格付与されると考えられる。

では、格付与子は何であろうか。統率による格付与は格付与能力のある語彙的主要部によってなされねばならない。SI構文は、主に格付与能力のない自動詞において観察される構文であるので、Vによって格付与されるとは考えられない。この問題は(31)の仮定により解決される。フランス語においては(36)のようにＳ構造においてVがIに繰上がっている。

(36)



VがIに繰上がれば、V-Iが語彙的な性質をもつと考えることができる。Iは格付与能力をもっているので、V-Iが統率によって格を付与できると考えても不自然ではない。

ここで問題となるのは、定動詞と主語NPが形態的に一致するということである。

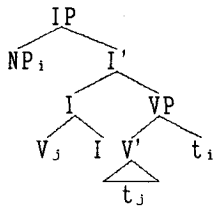
(1) Je ne crois pas [qu'ait crié [Pierre]].

通常の語順の場合には、主語NPはIP指定部の位置をしめるので、spec-head agreementによって形態的一致がなされる。しかし、(36)では主語NPがIP指定部にないので、この方法は不可能である。ではこの一致は何によって保証されるのであろうか。この問題は、(35)によって説明される。

(35)LFにおいて主語NPはIP指定部においてφ-featureのcheckingを受ける。

主語NPは、LFにおいてφ-featureのcheckingを受ける必要があるため、(37)のようにIP(AGRSP)指定部に移動する。

(37)



LFで主語NPがIP指定部に移動すると、spec-head agreementによってI主要部とのφ-featureのcheckingが行われる。ここで主語と定動詞が正しく一致していない文は排除されるのである。

このように、(31),(35)の仮定により、SI構文における主語NPへの格付与と動詞と主語NPの形態上の一致を簡潔に説明することができる。

3.2.2.目的語NPへの格付与に対する制約

前節で主語NPへの格付与について考察した。これを基に、本節では直接目的語を伴う動詞の場合の直接目的語NPへの格付与について考察し、目的語NPへの格付与に

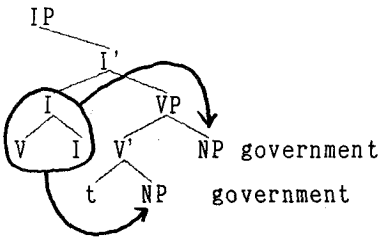
対する制約によってSI構文の分布上の制限が生じることを議論する。

動詞が直接目的語を伴う場合、格フィルターを満たすために格を必要とするNPが二つある。すなわち、主語NPと目的語NPである。主語NPはV-Iによって統率のもとに格を付与されることは前節で議論した。直接目的語NPも指定部の位置をしめていないので、一致によって格を受けることはできない。従って、統率のもとで格を受けないと格フィルターの違反を引き起こす。しかし、(32)の条件によって統率による格付与は妨げられる。

(32)一つのitemは二つのNPを同じ方法でCase-indexすることができない。

一つの要素であるV-Iは、統率という同じ条件のもとで二つのNPに格付与することができない。従って、直接目的語NPは格を受けられず、非文となるのである。

(38)*



このように、SI構文に分布上の制限が存在するのは、主語NP、目的語NPのいずれかが格フィルターに違反するためであると説明できる。

3.2.3.直接目的語が生起可能な場合

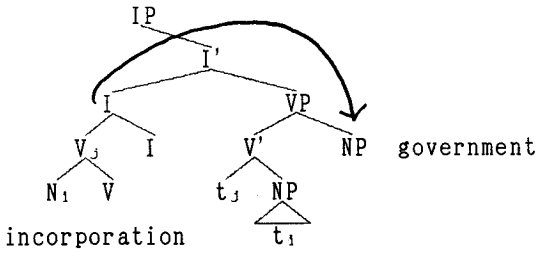
本稿の分析では、もし目的語NPがV-Iによる統率以外で格を与えられればSI構文が可能であると予想される。このことを実証する例が次のcliticを用いた文や関係節である。

(39)a.le mendiant à qui les a données Marie
the begger to whom them has given
”マリーがそれらをあげた乞食”
b.?les fleurs qu'a données au mendiant Marie
the flowers that has given to-the begger
”マリーが乞食にあげた花”

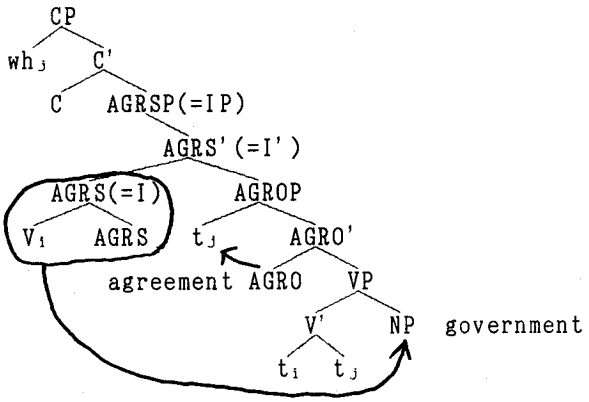
(39a)のように直接目的語をcliticにすればV-Iに編入することによって格フィルターを満たすことができる。目的語NPが統率によってV-Iから格を受ける必要がないので、(32)に抵触せず文法的となる。また、(39b)のように直接目的語を移動させれば、AGROP指定部を経由することができる。AGROがAGRSと同様、一致によって格を付与で

きるとすると、目的語NPがV-Iに統率のもとで格を受ける必要がなくなる。従って(32)に違反せず文法的となるのである。

(40)a.編入の場合



b.wh移動の場合



このように、直接目的語をとる動詞でもSI構文が可能である場合が存在することは、SI構文の分布上の制限が格付与に対する制約によるという分析を支持するものである。

3.2.4.AGROP指定部における格付与に対する制約

前節で、直接目的語がwh句で抜き出される場合、AGROによって格付与されるためSI構文が可能であると主張した。しかし、もしwh移動を含まない文の場合にも、S構造においてAGROP指定部に目的語が移動できるとすると、上で述べたような説明は不可能となってしまう。実際、wh移動を受けない目的語が、格を受けるためだけにAGROP指定部に移動することが不可能であることを次の例が示している。

(41)*Je me demande bien [quand a ces hommes invités [Paul]].
I wonder well when has these men invited

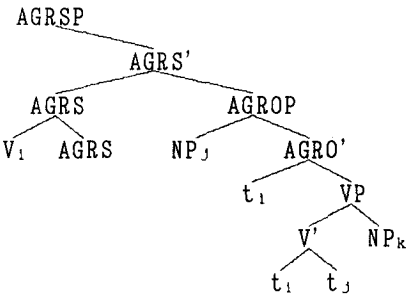
(41)では、定動詞の直後に目的語が置かれ、主語に先行している。従って、目的語

はAGRS主要部とVPの間、すなわちAGROP指定部にあるが、この文は非文である。
この事実は、(34)によって説明される。

(34)格フィルターの要請による移動の連鎖は局所的でなければならない。

(41)の文の補文の構造は次のようになる。

(42)



(42)において格フィルターの要請によるS構造での連鎖は(NP_j,t_j)と(NP_K)の二つである。この構造において、NP_kはt_jをC統御しているために、(NP_j,t_j)の二つのメンバーの間にNP_kが介在し、(NP_j,t_j)が局所的な連鎖となっていない。従って、(34)の違反となり、排除されるのである。wh移動を受ける場合やclitic化の場合は、連鎖が格フィルター以外の要請によるものであるから、(34)が適用されず文法的となるのである。また、LFにおけるφ-featureのcheckingに対しても(34)は適用されないので、LFでの目的語のAGROP指定部への移動は排除されない。
このように、SI構文の場合、直接目的語に対する格付与が非常に制限されるために分布上の制限が見られるのである。

3.3.通常の語順でのNPに対する格付与

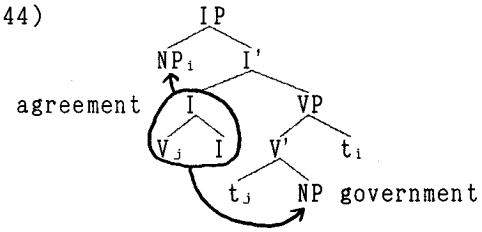
前節までは、SI構文においてV-Iが二つのNPに対して統率による格付与ができないために分布上の制限が生じると主張してきた。では、通常の語順で直接目的語が生起する場合、主語NPと目的語NPはどのように格を付与されるのだろうか。通常の語順の場合、主語NPはIP指定部に移動している。これは、主語NPが定動詞に先行することから明らかである。

(43)Paul a invité ces hommes.
has invited these men

この場合、主語NPはIP指定部にあるので、I主要部とspec-head agreementする。従って、統率ではなく、一致によってV-Iに格付与されることが可能になる。すると統率による格付与が他のNPに対してなされないので、直接目的語NPが統率のもとで

V-Iに格付与されるのが可能になる。二つのNPが異なった方法でV-Iによってそれぞれ主格、対格を付与されるので(32)に違反せず、問題なく適格となるのである。

(44)



このように、通常の語順の場合には直接目的語が問題なく生起することが、本稿の分析では従来の分析と全く平行的に扱うことができる。

3.4.VP指定部に生成される主語に対する格付与

3.1において、VPの場合には、主語は右側と左側のいずれの方向でも生起が可能であると主張した。この仮定に従うと、主語がV'の左側に生起し、その位置にとどまったままの構造も許されると予想される。しかし、(45)が示すように、VPの左側に生起する場合、主語NPが基底の位置にとどまることは許されない。主語がV'の左側、すなわち定動詞の直後に現れる文は非文である。

(45)*Est Paul parti.
has left ”ポールは出発した。”

これは、(33)の条件によって説明できる。

(33)統率による格付与は、おのおのの投射において主要部に対してcanonicalな位置にある要素に対してのみ可能である。

ここでのcanonicalな位置とは、当該言語において、主要部に対して補部が生成される方向と同じ方向にある位置という意味である。フランス語はhead-initialの言語であり、補部が主要部に対して右側に生成されるので、canonicalな位置は右側である。これをVPについて当てはめると、V'の左側の位置は、VP内においてcanonicalな位置ではない。従って(33)によって、主語NPに対する統率による格付与が不可能となる。もちろん、IP指定部にないので、一致によって主語NPが格を受けることもできず、非文となるのである。主語がV'の左側に基底生成された場合には、(46)のように主語がIP指定部に移動し一致によって格を受ければ文法的となるのである。

(46)Paul est parti.
has left

このように、主語がV'のいずれの側にも基底生成することはできるが、格理論の制約によって左側の位置にとどまることはできないのである。

4.分析を支持する現象

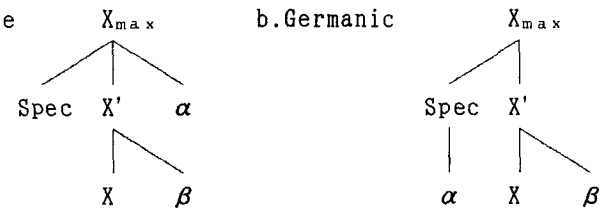
本章では、3章で提案した分析の妥当性を証明する現象を挙げていく。4.1では量化詞遊離現象を挙げ、VPの場合左右いずれの方向にも生成の可能性を許さねばならないことを示す。4.2ではイタリア語の自由倒置構文の例を挙げ、この構文を観察することで本稿の分析による予想が立証されることを示す。4.3ではthat-t効果の例を挙げ、本稿で提案するSI構文の構造によって、that-t効果についても正しい予想ができることを示す。

4.1.量化詞遊離現象

本稿では、(30)のようにVPの場合V'の左右いずれの位置においても主語NPが基底生成されるとし、SI構文は(29)のように主語NPがV'の右側に生成していると仮定した。本節では、左右いずれの方向にも主語が生成されるという主張が、量化詞遊離現象によって支持されることを主張する。

主語が右側に生成される可能性については、Giorgi and Longobardi(1991)が示唆している。彼らは、NP内の要素の抜き出しの可能性や代名詞の束縛などの現象を観察し、NP内の主語が生起する位置について次のようなパラメーターを仮定している[12]。

(47)a.Romance　　b.Germanic



α＝主語　　β＝補部

これによると、ロマンス諸語の場合主語がN'の右側に生成されるのに対し、ゲルマン諸語ではNP指定部に生成される。Giorgi and Longobardiはこのパラメーターが NP以外の範疇にも当てはまることを示唆している。彼らの主張に従えば、フランス語の場合、VPにおいても主語がV'の右側のみに生成されることになる。実際、SI構文において主語のしめる位置が基底生成される位置であり、通常の語順の場合の位置はV'の右側から移動することによってしめられる位置であると彼らは主張している。

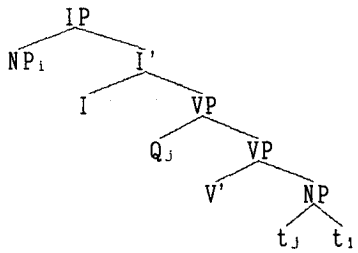
しかしVPの場合V'の左側に主語が生起できないとすると、問題となる現象がある。

次の量化詞遊離現象がそれである。

(48)Les enfants ont tous vu ce film.
the children have all seen this movie
”その子供たちは皆この映画を見た。”

この現象は、量化詞が量化するNPと離れて生起するものである。もしVPにおいても主語がV'の右側にのみ生成されるのであれば、(48)は主語NPがIP指定部の位置に移動し、量化詞がVPの左側に移動するという(49)のような派生を考えねばならない。

(49)

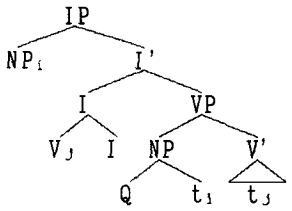


しかしこの場合、量化詞の移動の動機付けが明確でない上に、量化詞の遊離する位置が定動詞に隣接する右側の位置に限られるという事実も説明が困難である。

(50)*Les enfants ont vu tous ce film.
the children have seen all this movie

この事実に対しては、Sportiche(1988)が説明を与えている。Sporticheは、量化詞遊離現象において量化詞がしめる位置が、実際には主語の基底生成される位置であると主張している[13]。

(51)



この分析に従えば、移動しているのはNPであり、Qではないので(50)のような語順が生じる可能性はない。NPの移動も格を付与されるためという動機付けがある。従って、量化詞遊離現象を適切に説明するためには、(51)のように主語がV'の左側に生成される可能性も許さねばならない。

このように、Vの左側に量化詞が単独で生起する量化詞遊離現象によって、(30)のパラメーターの妥当性が支持されるのである。

4.2.イタリア語の自由倒置構文における格付与

3章において、フランス語のSI構文において直接目的語NPが動詞に後続できないのは、V-Iから統率によって格を受けると(32)の条件に違反するためであると主張した。

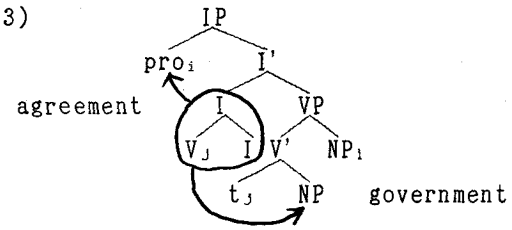
(32)一つのitemは二つのNPを同じ方法でCase-indexすることができない。

この分析によると、動詞に後続する場合でも、(32)に抵触せずに目的語NPが格を与えられれば文法的になると予想される。動詞に後続している主語NPがV-Iから統率以外の方法で格を付与される場合にこのことが確かめられる[14]。イタリア語の自由倒置構文がその例である。イタリア語はフランス語と異なり、proの生起を許す言語である。先にも述べたように、Rizzi(1992)はこの事実を踏まえ、イタリア語の自由倒置構文について、次のようにIP指定部にproを設定した分析を提案している。

(52)pro ha telefonato [Gianni].
has telephoned ”ジャンニは電話をした。”

この場合、IP指定部にあるproがIとのspec-head agreementによって格を付与されることが可能である。IP指定部にあるproと動詞に後続する主語NPは、大連鎖を形成すると考えられる。従って、主語NP自身が格を受けなくても、proが格を受ければ、大連鎖(pro_i,NP_i)が格フィルターを満たすことになる。すると、直接目的語NPがVの補部にあっても、V-Iから統率によって格を受けることが可能となり、文法的であると予想される。

(53)



実際、Burzio(1986)が指摘しているように、イタリア語の自由倒置構文は直接目的語が動詞に後続していても可能である[15,16]。

(54)Esamineranno il caso [molti esperti].
will examine the case many experts
”多くの専門家がこの事件を調査するだろう。”

この事実は、自由倒置構文においてproを仮定する分析及びSI構文における制限を格

理論で説明する本稿の分析が妥当であることを示している。

4.3.that-t効果

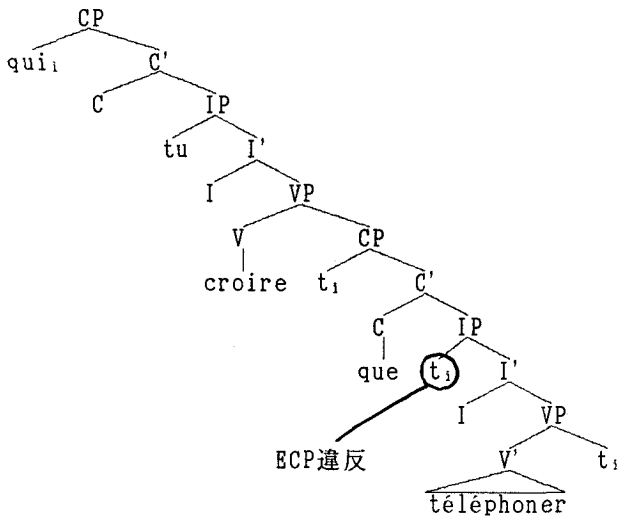
２章において、フランス語においてthat-t効果が見られないという事実は、フランス語にproを認める分析に対して問題となると主張した。

(25)Chi credi　　che　e　telefonerà?
　who you-believe that　　will-telephone
(27)*Qui crois-tu que e téléphonera?

ではこの現象はどのように捉えることができるだろうか。本節では、この現象が(35)及び本稿で提案するSI構文の構造の妥当性を証明するということを示す。

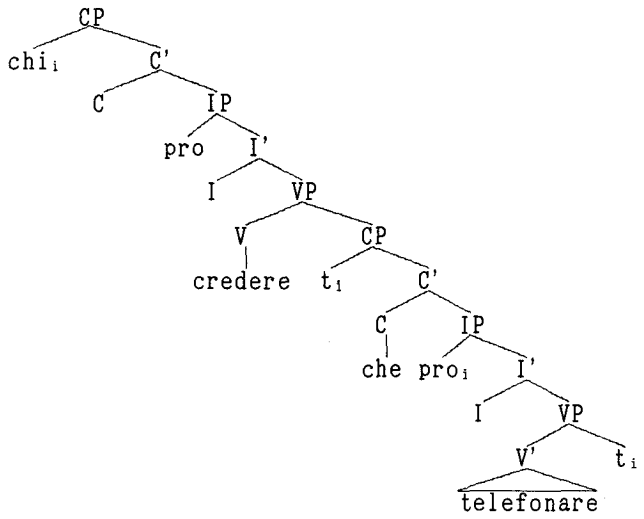
(35)の仮定によると、主語NPはLFにおいてIP指定部においてφ-featureのcheckingを受けねばならない。フランス語ではproの生起が許されないので、S構造でIP指定部が空である。従って、主語NPがwh移動している場合、LFで主語NPがφ-featureのcheckingを受けるためには、IP指定部の位置に痕跡が必要となる。しかし、queのとるIP指定部の位置はECPを満たすことができない位置なので、この位置に痕跡があると非文となるのである。

(55)*



これに対して、イタリア語等のpro-dropの言語では、主語の位置にproが生起できるので、proがLFでIP指定部においてφ-featureのcheckingを受けることができる。このproはVP内に生起するNPと大連鎖をなしているので、大連鎖のmemberであるVP内のNPと定動詞との一致が保証されるのである。

(56)



このように、フランス語のSI構文では、LFでIP指定部において主語NP自身もしくはその痕跡がφ-featureのcheckingを受けねばならないという点でpro-drop言語と異なるために、that-t効果が見られると説明できる[17]。このように考えれば、イタリア語の自由倒置構文とフランス語のSI構文の間の直接目的語に関する分布上の相違と両言語におけるthat-t効果の有無という一見無関係に見える現象を、proに関するパラメーターによって平行的に扱うことができる。

5．まとめと展望

本稿は、次の仮定をたてることによってSI構文における構造を考察し、直接目的語の生起に関する分布上の制限をＧＢ理論の格理論の観点から説明した。

(57)フランス語のVPにおいて主語NPはV'の左右いずれの位置においても基底生成が可能である。
(58)フランス語では、Ｓ構造でVがIに繰上がっている。
(59)一つのitemは二つのNPを同じ方法でCase-indexすることができない。
(60)統率による格付与は、おのおのの投射において主要部に対してcanonicalな位置にある要素に対してのみ可能である。
(61)格フィルターの要請による移動の連鎖は局所的でなければならない。
(62)LFにおいて主語NPはIP指定部においてφ-featureのcheckingを受ける。

また、これらの仮定が、量化詞遊離現象、イタリア語の自由倒置構文、that-t効果に関する現象によって支持されることも示した。

理論的には、VP内主語仮説の更なる裏付けを提示し、格付与における３種類の方

法、すなわち統率、一致及び編入の区別の必要性を主張した。分析でたてた仮定の位置づけについては、(57),(58)がパラメーターによって指定されるもので、(59)～(62)が普遍的な条件であると考える。

これらの仮定、特に(60),(61)に関してはその妥当性に関して更に考察を加えねばならない。また、注1)で述べたSI構文の生起する環境に関する制限に対する従来の説明は不十分であり、研究の余地があるものである。これらの問題に関しては、今後の研究の課題としたい。

注

*この論文を書くにあたって、インフォーマントとして、Jacques Lalloz氏にご協力いただいた。また、研究室の先輩である岸田泰浩氏に貴重な助言を頂いた。ここに謝意を表したい。

1)フランス語におけるSI構文には、本稿で扱う分布上の制限以外に生起する環境にも制限がある。以下の例に示されるように、wh句（関係詞を含む）を含む文、接続法の動詞を含む従属文で随意的に現れ、通常の直説法の動詞を含む文では不可能である。疑問文の場合、wh句が現れない場合は主語NPを主語代名詞で繰り返す複合倒置を用いねばならない。

wh句を含む疑問文

a.Quand partira ton ami?
when will-leave your friend ”君の友達はいつ出発するの。”

b.Quand ton ami partira-t-il?

wh句を含む間接疑問文

c.Elle sait très bien à quelle heure partira ce garçon.
she knows very well at what time will-leave this boy
”彼女はこの少年が何時に出発するのかよく知っている。”

d.Elle sait très bien à quelle heure ce garçon partira.

関係節

e.Le problème auquel réfléchit le savant est trivial.
the problem to-which thinks the scholar is trivial
”この学者が考察している問題は自明のことだ。”

f.Le problème auquel le savant réfléchit est trivial.

接続法の動詞を含む文

g.J'exige que soit éliminée cette solution.
I require that be eliminated this solution
”私はこの解決法が削除されることを要求する。”
h.J'exige que cette solution soit éliminée.
wh句を含まない疑問文
i.*Partira ton ami à 9 heures?
will-leave your friend at hours
”あなたの友達は9時に出発するの。”
j.Ton ami partira-t-il à 9 heures?
wh句を含まない間接疑問文
k.*Je me demande si partira ton ami.
I wonder if will-leave your friend
”君の友達は出発するのだろうか。”
l.Je me demande si ton ami partira.
直説法の動詞を含む平叙文
m.*Marie pense qu'a crié Pierre.
thinks that has cried
”マリーはピエールが叫んだと思っている。
n.Marie pense que Pierre a crié.

SI構文がwh疑問文と接続法の用いられる文においてのみ見られるという制限にに関しては、Kayne and Pollock(1978)が[wh]もしくは[+F]（接続法）という素性をCOMPがもっている場合にNP後置が許されるという定式化をしている。ここでは仮に、C-headがもつ[wh],[+F]がhead-head agreementによってCからI,Vへと与えられ、この素性をVがもつ場合にのみSI構文が可能であると考えておく。

2)Deprezは、Pollock(1989)に従い、IPをT(ense)P,AGR(eement)Pに分割する構造を仮定している。本稿もこの構造を仮定するが、以下では、AGROPとAGRSPの区別が重要となる場合以外はAGRPをIPと表記し、TPは省略する。

3)stage level predicateとは、一時的あるいは移行的な状態、動作を表す述語であり、individual level predicateとは不変的な状態を表す述語である。この両者の違いについてKratzer(1989)は次のように議論している。stage level predicateの場合には空間時間的な外項(spatiotemporal external argument)が存在するのに対し、individual level predicateの場合にはこの項が存在せず、主語が外項となる。外項以外の項は全てD構造においてVP内に生成されるので(Williams(1981))、stage level predicateの場合主語はVP内に生成されるのに対

し、individual level predicateの場合主語は外項としてIP指定部に生成される。

4)absorptionとは、Higginbotham and May(1981)の用語で、多重wh疑問文の１対１の解釈(bijection intepretation)等において、二つのoperatorを合併し、単一のoperatorを形成する随意的な規則である。

5)(29)の構造において、IP-指定部の位置は空である。フランス語の場合、このことは一見、問題であるように思われる。フランス語では通常、主語NPが動詞に後続した場合、IP指定部の位置が空であることは許されず、虚辞の代名詞が必要であるからである。

a.Il est arrivé trois filles.
it has arrived three girls ”少女が三人やってきた。”
b.*Est arrivé(es) trois filles.

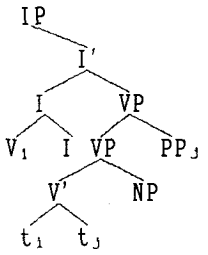
bのように"il"が生起しない場合、なぜ非文になるかということが問題となる。この解決案として、[+AGR]のIは主格を必ずNPに与えねばならないという条件があると考えることができる（この条件はパラメーターである可能性がある。）。
Belletti(1988)は、上のような非人称構文における動詞に後続するNPは、動詞によって固有格である分格(partitive case)を付与されると主張している。これに従うと、動詞に後続するNPは主格を受けないので、主格を受けるNPが他に必要となる。従って、非人称構文においてIP指定部をしめる"il"の生起が義務的となると説明できる。SI構文の場合には、VP内にある主語NPが主格を受けるので、IP指定部が空であっても問題ないのである。

6)SI構文において、次のように前置詞句が主語NPに後続している例も容認可能である。

a.?Je me demande bien quand ont mangé beaucoup de
I wonder well when have eaten many of
linguistes dans ce restaurant.
linguists in this restaurant
b.?Je ne crois pas qu'aient mangé beaucoup de linguistes
I believe not that
dans ce restaurant.
c. les fleurs qu'a données Marie au mendiant
the flowers that has given to-the begger

この例は(29)の構造に対する反例に見える。しかし、Kayne(1986)はこれらの例は前置詞句が主語NPの右側に移動した例であると分析している。これを本稿での分

析に採用すると次のような構造であると考えることができる。



7)Pollock(1989)は、英語の場合IがVへ移動するのに対し、フランス語の場合VがIへ移動すると主張している。この違いは、次のように、定動詞と副詞との語順の違いに反映される。

a.*John likes not Mary.

b.Jean n'aime pas Marie.
likes not

c.*John kisses often Mary.

d.John often kisses Mary.

e.Jean embrasse souvent Marie.
kisses often

f.*Jean souvent embrasse Marie.

英語の場合Vが移動しないので副詞が定動詞に先行するのに対し、フランス語の場合Vが移動するので定動詞が副詞に先行する。

8)Baker(1988)は、この条件によって次のNiueanの例を説明している。

a.Kua fā fakahū vakalele tuai he magafaoa
PERFECTIVE-HABITUAL-send-airplane-PERFECTIVE ERGATIVE-family
e tau tohi.
ABSOLUTIVE-PLURAL-letter
”家族は手紙を航空便で送ったものだった。”

b.*Kua fā fakahū tohi vakalele tuai e magafaoa.
PERFECTIVE-HABITUAL-send-letter-airplane-PERFECTIVE ABSOLUTIVE-family

aでは"vakalele"がVに編入し、"tohi"が統率によって構造格を受けることによってそれぞれ格フィルターを満たし、文法的である。これに対し、bでは二つのNPがVに編入している。これは、(32)の条件に違反するため非文であると説明される。

9)Giorgi and Longobardi(1991)は英語やイタリア語の現象を観察し、V'の右側に格

付与が許されるのに対し、VP指定部には許されないという同様な仮定をたてている。

10)フランス語においてS構造でNPがAGROP指定部に移動している文が非文であることについて、Chomsky(1991)はこの構造が格に関するChain Conditionによって排除されることを示唆している。

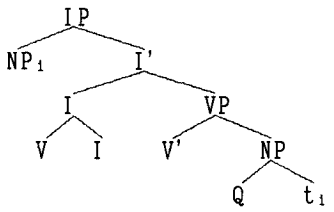
11)φ-featureとは、Chomsky(1981)等において提案されている概念で、性、数、人称などの文法的素性の集合を指す。Chomsky(1991)は、このfeatureは、LFにおいてAGR主要部とのspec-head agreementによって適切かどうかがcheckされるとしている。

12)このパラメーターを設定することによって、Giorgi and LongobardiはNPに関する英語とフランス語における多くの違いを説明している。一例を以下に挙げる。

a.*his/*John's books of my favorite writer
b.his/John's books by my favorite writer
c.ses livre de mon auteur préféré
  his book of my writer favorite

英語のNPでは、a,bのようにbyを用いなければ、外項であるpossessorとagentが同時に生起するのが不可能であるのに対し、フランス語ではbのように"par(by)"を用いなくても可能である。この対立が生じるのは、英語の場合外項の生成される位置が指定部に限られるのに対し、フランス語の場合指定部とN'の右側の両方の位置が外項の生成される位置として可能であるためであると説明される。

13)SI構文で主語NPがV'の右側に生成される場合、基底の位置でNPが格付与される。従って、次のように主語NPがIP指定部に移動し、量化詞が基底の位置にとどまる派生は、経済性の原理の違反となり非文であると予想される。



この予想に反すると思われる例が存在する。次のように、SI構文の生起が許される関係節において、量化詞が節の最後に現れる例は容認可能である。

?Les étudiants qui ont vu ce film, tous
 the students that have seen this movie all

”皆がこの映画を見た学生”

この例については、次のような分析が可能である。このように量化詞が単独で文末に生起する場合、必ずポーズが必要である。また、"presque(almost)"などの修飾語を伴わない場合、容認度が下がる。更に、このように量化詞が文末に生起する例は、SI構文が許されない環境においても容認可能である。このことから、上の例は、量化詞が基底の位置にとどまっているのではなく、強調のために文末に付加していると考えることができる。この可能性については更に検討する必要がある。

14)Pollock(1989)は、イタリア語のAGRは豊富であることから、フランス語と同様θ役割に対して透明であり、イタリア語においてもVがIに繰上がることを示唆している。

15)Burzio(1986)も自由倒置構文においてIP指定部にある虚辞の要素が格を受け、動詞に後続するNPに格が転送されるという同様の分析をしている。

16)Contreras(1991)によると、イタリア語と同じpro-drop言語であるスペイン語においても自由倒置構文が見られ、直接目的語の生起が可能である。

Sabe la lección María.
knows the lesson
”マリアはその授業を知っている。”

この例もイタリア語と同様に説明される。

17)フランス語において補文の主語の抜き出しが全く不可能というわけではない。次のように補文標識が"qui"という形式であれば、抜き出しが可能である。

Que$_i$ crois-tu qui t$_i$ est arrivé?
what believe you that has happened
”君は何が起きたと思うか。”

この現象について、Rizzi(1990),Manzini(1992)は次のように主張している。
疑問詞"que"が補文のCP指定部を経由し、そこでC主要部とspec-head agreementによって一致する。この一致した補文標識が"qui"である。一致したC主要部のAGRは統率子であるので、IP指定部の痕跡が主要部統率(head-govern)され、ECPを満たし文法的となる。これに対し、(25)の補文標識"que"は一致した形式でないので、統率子とはなれない。従って、痕跡が主要部統率されず、ECPを満たすことができないのである。

参考文献

Baker, Mark (1988) Incorporation, University of Chicago Press, Chicago.

Belletti, Adriana (1988) "The Case of Unaccusative", Linguistic Inquiry 19, 1-34.

Borer, Hagit (1986) "I-Subjects", Linguistic Inquiry 17, 375-416.

Burzio, Luigi (1986) Italian Syntax—A Government-Binding Approach—, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht.

Chomsky, Noam (1981) Lectures on Government and Binding, The Pisa Lectures Foris, Dordrecht.

Chomsky, Noam (1986a) Knowledge of Language, its Nature, Origin, and Use. Praeger, New York.

Chomsky, Noam (1986b) Barriers. The MIT Press, Cambridge.

Chomsky, Noam (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation", In Robert Freidin (ed.), Principles and Parameters in Comparative Grammar, The MIT Press, Cambridge.

Contreras, Heles (1991) "On the Position of Subjects", In James Mccloskey (ed.), The Syntax of Verb-Initial Languages, Elsevier Science Publishers B. V., Amsterdam.

Deprez, Viviane (1990) "Two Ways of Moving the Verb in French", In Lisa L.S. Cheng and Hamida Demirdash (eds.), MIT Working Papers in Linguistics Vol.13, MIT, Cambridge.

Diesing, Molly (1992) Indifinites. The MIT Press, Cambridge.

Dubisson, C. (1979) "A reanalysis of stylistic inversion in French," In Batistella (ed.), Proceedings of the IXth meeting of the North Eastern Linguistic Society.

Emonds, J. (1976) A transformational approach to English syntax. Academic Press, New York.

Fukui, Naoki (1986) A Theory of Category Projection and Its Application. Doctoral dissertation, MIT.

Giorgi, Alessandra and Giuseppe Longobardi (1991) The Syntax of Noun Phrases, Cambridge Univ. Press, Cambridge.

Higginbotham, J. and R. May (1981) "Questions, quantifiers and crossing," TLR 1, 41-79.

Kayne, Richard S. (1975) French Syntax. The MIT Press, Cambridge.

Kayne, Richard S. (1986) "Connexité et Inversion du Sujet", In Ronat, M. et Couquaux, D. (eds.), La Grammaire Modulaire.

Kayne, Richard S., and Jean-Yves Pollock (1978) "Stylistic Inversion, Successive Cyclicity, and Move NP in French", Linguistic Inquiry 9, 595-621.

Koopman, Hilda and Dominique Sportiche (1991) "The position of subjects", In James Mccloskey (ed.), The Syntax of Verb-Initial Languages, Elsevier Science Publishers B. V., Amsterdam.

Kuroda, Sige-Yuki (1988) "Whether We Agree or Not", Linguisticae Investigationes 12, 1-47.

Manzini, Maria Rita (1992) Locality—A Theory and Some of Its Empirical Consequences, The MIT Press, Cambridge.

Noonan, Maire (1989) "Operator Licensing and the Case of French Interrogatives", WCCFL 8, 315-30.

Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP", Linguistic Inquiry 20, 365-424.

Rizzi, Luigi (1990) Relativized Minimality. The MIT Press, Cambridge.

Rizzi, Luigi (1992) "A Parametric Approach to Comparative Syntax—Properties of the Pronominal System", 第10回日本英語学会特別講演ハンドアウト.

Rizzi, Luigi and Ian Roberts (1989) "Complex Inversion in French", Probus 1.1, 1-30.

Rochemont, Michal S. and Peter W. Culicover (1990) English Focus Constructions and the Theory of Grammar, Cambridge Univ. Press, Cambridge.

Sportiche, Dominique (1988) "A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structures", Linguistic Inquiry 11, 425-449.

小川裕花 (1992)「フランス語の主語接辞倒置構文と文体倒置構文」,『フランス語学研究』第26号, 38-48.

丹羽　卓 (1982)「現代フランス語の主語倒置—その構造と機能」,『フランス語学研究』第12号, 29-38.

(ふじた　たけし、博士後期課程)